
妄想は世界を侵食する

クルツノナワ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想は世界を侵食する

【Nコード】

N7161J

【作者名】

クルツノナワ

【あらすじ】

妄想にふける少年が、美少女を前に世界を救ったり、英雄になったりする話……かもしれない

くプロローグく

「ねえ、早く起きてよ」

優しい声が俺の耳に届く。甘く、心地よいその声に俺の意識を委ねたくなる。

「もう、いつまで寝ているつもり。遅刻しちゃうよ」

そっと、目を開けば俺の前には美少女。

ただの美少女ではない。超美少女だ。それが俺の腹部の上に乗っている。

どこか妖艶すら漂わせるその雰囲気には俺は眼前の超美少女に話しかける。

「昨日は寝るのが遅かったんだ。もう少し寝させてくれよ。お前も、分かってるだろ？」

宮野。守ばりのスイートボイスで囁く。

俺のその言葉に超美少女の頬が赤く染まる。赤く実った果実のように瑞々しいその頬は、ただただ美しかった。

「分かってるけど……私だって、眠いんだよ。それにまだ身体の調子がおかしいし」

ボソボソと呟く声はかすかに耳に届く程度。けれど、俺の耳にはしっかりと聞き届いていた。

俺は、超美少女の肩を掴むと横になっていた自分に抱き寄せる。きやつ、と可愛い声が俺のすぐ横で聞こえた。

「ちよつと駄目……。学校、遅刻しちゃう……」

拒む声に、しかし力はなくて。

まったく、どこまでも素直になれない子猫ちゃんだぜ。

「いいじゃないか。今日くらい休んだって」

「でも、そんな……」

「今日一日はお前とずっと一緒にいたいんだ。俺が、そう思ってるんだ。それじゃ、駄目か？」

ぎゅっと抱いた手に力をわずかに込める。
壊れないように、だけど離れないように。

「うつん……駄目じゃないよ」

目が潤む。超美少女はそっと目を閉じて、唇をかすかにつき出した。俺はそれに答えるために、彼女の唇に近づいて――

ガン!!!!!!!!!!!!

強烈な痛みが、俺の頭蓋へと叩き込まれた。

[illegible]

マジで痛い。涙がこぼれそうになるほど痛い。
つか、罅はいったんじゃね？

「俺の授業中に寝るとはいいい度胸だな。ん？ 朝字？」

痛む頭を押さえていると頭上からはそんな声が聞こえた。
それで気づく。ここは俺の通う学校であり、先ほどまでののは全て夢だったのだと。

「しかもわけのわからない寝言をぶつぶつと……。気持ち悪いにもほどがあるな」

散々に言ってくれるなあ。これで教師を名乗るんだから世の中というのは実におかしい。

目の前にいるのは、我がクラス担任の三葉教師^{みつば}。

女性でありながら男言葉を話して、すぐに手が出る暴力教師である。

昨今、暴力など振るえばPTAが黙っていないが、三葉教師は平然と。

「壊れたTVは叩くと治る。だから、それと同じ事をしてるだけですがなにか？」

そう言い返したという逸話がある。

……恐ろしい。なにが恐ろしいって、この教師。なら壊れた保護者もそうしようか、などと口にしたとか。

それ以来、三葉教師に口を出すものはいない。

「先生……。仮にも教師が生徒に気持ち悪い発言は些か問題なので」

「文句があるのなら、校長を通して言うようにしろ」

「あんだ、校長よりも偉いのかよ!？」

溜息をついて俺は周りを見渡す。

クラス中の注目の的だった。笑いものだった。
……チクシヨ―。

「気をつける。次は私の六法全書が火をふくぞ」

「いつか本気で人を殺しますよ」

「心配いらん。その時は証拠など残すへまなどしない。私がするなら完全犯罪だ」

この人は捕まえておいたほうがいいのではないだろうか。
人類のためにも。

「では、馬鹿は放置して。次の56P。田中、朗読しろ」

三葉教師は何事もなかったかのように授業を進めていく。
俺の頭は、いまだ痛みを訴えている。

「あっはっはっは、いやあなかなか笑わせてくれるな、お前は」

「笑わせるつもりなんかこれっぽっちもなかったがな」

目の前で豪快に笑っているのは俺の数少ない友人であるかけたりしのぶ駆足志信だ。俺がこの学校に通ってからの友人なのだが、成績運動ルックス良しのイケメン男。

無論、そんな男を女子が放っておくわけもなく、いつも誰かに告白されている。

憎らしいことこの上ないが、俺は別に女子にモテていることが憎いわけではない。

単純に男として、スペックの性能の差が憎いのである。

だというのに、この男は俺を心友、いや神友だな、などと言ってくる。

正直うっとおしいが、この男が俺の友人であるのは俺自身認めている。

それにはある経緯が関係しているのだが。今は関係ないので割愛する。

「あの……駆足くん。好きです。付き合ってください！」

「ごめん、無理。それにしても、一体どんな夢を見てたんだよ」

「……………」

すげえ。

男子二人談笑(?)してる中で割り込んで告白してきたよ。即答で断ったよ。

告白した女子はどよーん、という擬音が届いてくるほどのオーラを

纏って去っていった。

たった今一つの恋が砕けたというのに、その張本人は何処吹く風だ。

「お前ね、ちよつとは悩む素振りとかしてやれよ」

「何言ってるんだよ。向こうが本気で来たんだから、こつちも本気で答えてやっただけだろ。期待させるほうが酷いつての」

「そりゃ、そうかもだけどさあ」

「そんなことより、話の続きは？」

そんなことときたか。

今クラス中の男子から殺意に溢れた視線が突き刺さったというのに、駆足は気づいていない。

本当に、よくこいつの友人をやれるな俺も。

「別に大したもんじゃねえよ。ちつとばかり甘い夢を見てたんだよ」
「そりゃあお前の寝言を聞いてりや分かるつての。俺が言ってるのは、お前が呟いてたほどの夢の内容だよ」

……俺は一体何を口走っていたのだろうか。

目の前のこいつに聞いてみたいが、聞いたら終わりの気もする。
尊厳とかそういった大事なものが。

嘆息しつつ、俺は見ていた夢の内容を話していた。

まあ、今更隠すほどの仲でもないしな。

俺の話を聞いた駆足は、ふむふむ、と鷹揚に頷いた。

「駄目だこいつ。早くなんとかしないと」

「それがお前の言う神友にかける言葉かコラ」

「ははっ、冗談だよ。でもさ、なんでお前ってモテないんだ？」

純粹100%という目でこちらを見る駆足。

抉り出したるかこいつ。

「ケンカ売ってるのか、それは」

「ちげーよ。俺は本気で言ってるんだよ」

何故か知らんが、こいつは俺がモテて当然と思っているらしい。

こいつに言われても悪意にしか感じられんが、本人は至極真面目にそう思っている。

「そんなん言われても俺が知るか。大体、俺は三次元女子に興味なんかねえっての」

「ああ、そういえばお前って二次元にしか興味ないって言ってるんだっけ」

「そうだよ。三次元なんざ滅べばいい。二次元の世界に行きたいぜ」

「はははっ、またまたそんなこと」

うーむ、こいつには「冗談にしか聞こえてないようだ。」

俺は本気なんだがな。

キンコーンカーンコーン

「おっと、時間か。じゃあまた後でな、一巳」
「へいへーい」

授業開始のチャイムが鳴って駆足が自分の席に戻っていく。
まあ、こちらとしても暇潰しにはなったか。

さて、ここらで自己紹介をしておこう。
誰にする必要があるのか分からないが、とにかくしておかなくちゃ
いけない気がしたのだ。
深く考えないようにしよう。

俺の名前は朝字一巳。あさのじいつつみ
星翔学校せいしょうに通う高校一年生である。

まあ、普通の男子高校生だが、趣味はゲームやアニメに漫画だ。
よくそれを口にするとかタクだと言われるが、別にオタクではない
と思う。

それらが単純に好き、というだけでオタクという言葉に括ろつとす
るのは現代人に流布されたイメージ的なものだろうか。

あくまで俺のは趣味だ。

そりゃあちよつぱり二次元の女の子が好きだけど、嫁にしたいけど、萌えとか思ってるけど。

断じてオタクではないだろう、うん。

そんなこんなで俺は平々凡々とした日々を過ごしているわけだが。いつかは、俺も学校を卒業して、社会へとでて、組織の中で生きていく。

いわゆる普通の生活が訪れるんだろう。

剣や魔法、ドラゴンなどのファンタジーはないし。

宇宙から異星人が攻めてくるといふSFもないし。

幼馴染や義理の妹や学校の先輩たちとのウツフキヤツキヤなギャルゲー展開もない。

あるわけがない。

それらが妄想のネタになったとしても。

俺の周りは何も変わることはない。

俺はそう思っている。思っで、いたんだ。

だから――

「一巳くん」

俺は気づかなかった――

「好きだよ」

非日常へと変わっていくその瞬間を――

ここではないどこか遠い場所での会話

「システムの調子はどうなってるん？」

漆黒に包まれた闇の中で、一つの声が響く。

それは男なのか女なのか、子供なのか老人なのか。

見分けがつかないその声は、確かに闇の中から発せられた。

だというのに、その声の主の気配はどこか希薄で。

まるで陽炎のようだ。

「今のところ問題ありません。正常に稼動しています」

その陽炎の声に応えたのは一人の少女。

わずかに漆黒の闇が薄らいだような感覚。

その感覚が少女の全身を包む。

「そか。んじゃ、始めるか」

不確かな陽炎は、口調こそ軽いものだがそこに込められたものは重みを滲ませている。

少女は、はあ、と一つ嘆息して。

「というかマスター、いい加減この小芝居面倒くさいです」

カチリ、と部屋の電気をつけた。

「ちよつ、待て待て！　せつかくいかにも怪しいやつら、みたいな演出をしたかったちゅうのに！」

「まったく必要ありません。そもそも、誰に向けての演出なんですか」

「いや、それはモニター向こうの人とか……なあ？」

少女の前にいる人物は、黒いフードを被っていまにもサバトなる儀式を開こうとする邪教徒っぽい姿をしていた。

つか、滅茶苦茶怪しかった。うさんくささ爆発だった。

「意味が分かりません。なんですか、モニターって」

「それを口にしてしまうと、こう時空が乱れるんよ。堪忍してくれ」

少女はまた一つ、大きく嘆息して。

「『計画』は動き出して、結果は神のみぞ知る、ですか。いえ、神すらも知らないかもしれませんね」

そう、誰にともなく呟いた声は、虚空へと消えていった。

ゝプロローグゝ（後書き）

初投稿です。

ゆっくりスローペースでの連載になると思います。

文章は色々とかオスなので生暖かい目で見てください。

く 第一話 顕現 く

夕焼けに染まる校舎。

誰の目にも届かないその裏庭に俺はいた。

別に俺は放課後の誰もいない校舎裏でたそがれる、なんて心はもっていない。

理由があつて、俺はそこにいた。いや、呼び出されていた。

「来て、くれたんだ……」

俺の目の前には、俺と同じ制服に身を包んだ少女が夕焼けの光で立っている。

わずかに紅潮した頬が見えるのは夕焼けのせいか、それとも別の理由からなのか。

彼女は、手を握りながらもじもじとしている。萌える。

「ゴメンね。急にこんなところに呼び出したりして」

「いや、そんな気にしてないから。それで、話って？」

喉が渴いてるせいか、少し声が上擦ってしまった。

人気のない校舎裏、顔を染めた少女。いくら鈍感な男でも、このシチュエーションで察せないことはないだろう。

もしかしてという期待と、まさかという否定。
二つの考えが俺の頭を巡っていた。

そんな俺の様子に彼女は気づくこともなく、何度も口を開いてはすぐに閉じてしまう。

それで目の前の少女も緊張していることに気づいた。
気づいて、わずかに俺の鼓動が、期待が高まる。

「あの……その、ね」

「……うん」

一時間にも一分にも感じた沈黙を破って、彼女が言葉を紡ぐ。
俺はそれに頷きで答えて。

「私、一巳くんが」

今すぐに彼女を抱きしめたい衝動を必死で抑えて。
あふれ出す感情を理性で押しとどめて。

彼女の言葉を一言一句逃さないように耳を澄ませて。

「好きだよ」

「俺も大好きだア——イウォ——ンチュ——！！！！！！」

瞬間、言葉を重ねていた。

『妄想は世界を侵食する』

「イーッエス、イエスイエス！！ ついに全ヒロインコンプリィ
——トオオオ！！！」

画面の向こうで主人公と藤村渚^{ヒロイン}の抱擁CGが映された中、俺はガッツポーズをあげていた。
ええ、全部ゲームの話でしかなかったか？

ちなみに、最後のセリフは俺の魂のリビドーがあふれだした結果である。

「ふっ、これで見事ギャルゲー500本斬り達成か」

独り虚しく呟いて、俺はどこか遠い目をする。

長かった……。ここまでの道のりは果てしないものだったが、俺はそれを見事乗り切ったのだ。

「あれ、なんでだろ。哀しいことなんてないのに、涙がでてるや」

嬉しいときにも泣いて出るんだね。父さん、母さん。一巳はまた一つ大人になりましたよ。

「記念の500本目ということもあって、なかなかの良ゲーだったしな。萌え度90ってところか」

学校から帰ってきて、早速ゲームプレイを始めて。

我ながら残念な思考回路だと思うが、俺の頭がそうなってるんだから仕方ない。

昔から俺にとって現実とは、つまらんクソゲーをプレイしてるようなものなのだ。朝字一巳という男のな。

だからこそこうしてゲームに限らず、創作物に、ファンタジーに、俺は憧れに近いものを抱いている。

と、これこそつまらん話だな。

「ふう、気づけばもう夕食時だな。とりあえず、腹膨らませるのに何か作るか」

さて、ここからは俺の自己紹介パート2にでもはいるう。

誰にする必要があるのかやっぱり分らないが、気にしていても仕方ない。

最初に言っておくと、俺に両親はいない。

あーあー、いないと言っても家をあけてるだけであってちゃんと健在だ。

俺の両親は付き合っていた頃から、周りにバカップルっていうかバカな男女と言われるほどに仲が良い。

結婚した後も、俺を生んだ後もそれは続いていた。お陰で俺は両親が苦手だ。

嫌いではない。ちゃんとこうして育ててくれた訳だから感謝だっっている。

でもなあ、想像してもみる。物心つく前から夫婦の仲をじかに見てきたわけだが。

「いやあ、ママは今日も美しいなあ。毎日見ているのに、その輝きは衰えるどころか増すばかりだよ」

「もう、パパったら。パパだって、そのダンディズムあふれる顔は

日増しに羨みを感じられるわ」

「ママのほうこそ、その澄んだ綺麗な声は、船を難破させると言われるマーメイドの歌声以上だね。ママが口を開けばきっと世の男性たちはママに魅了されてしまうね」

「あらあら、パパも素敵よ。今年を感じさせないエネルギーに満ちた肉体は、女性の視線を惹きつけるもの。ママ、嫉妬しちゃう」

「はっはっは、そんな心配しなくともパパの全てはママに捧げてるんだから。パパだって、ママにいつパパ以上の男が現れるかドキドキしてるんだぞ」

「ふふふ、パパ以上の男なんて、それこそパパ以外にありえないわよ」

「ありがとうママ。それじゃ今夜……どうかな」

「パパったら……私の返事なんて一万年と二千年前から決まってるんだから」

なんて会話を毎日してるんだぞ。現在進行形で。

うざい。うざすぎる。苦手にもなるってんだ。

いきなり、弟か妹欲しくないと聞かれたりしてたんだ。

まあ、それほどラヴラヴ——ラブではなくラヴな——な夫婦なもんで不定期に旅行に行ってるのだ。

今回はエッフェル塔を見に行く、とか言ってたな。

その旅行というのも俺が中学生になってからそうやって国外へ出る

ことが多くなったのだ。

そんなわけで、俺は生きていくためにも必要に駆られて自炊をしていたもんだから、一応家事全般はそれなりにこなせるほうなのだ。はい、自己紹介終了。

「まったく、息子放って自分たちは旅行三昧とはな。その分俺も好きにできるからいいけどさ。これって育児放棄じゃね？」

ぶつぶつ文句言っても当人たちがいないので意味はないのだが。それでも愚痴の一つくらい言ってもいいのではないだろうか。

多くのビルが立ち並んだオフィス街。

そこにまぎれるように一つのマンションがあった。

そのマンションを一言で表すならば、「異様」だった。

高さは十五階ほどであろうか、それに相当するほどの部屋も外から分かるほどに存在している。

だというのに、そのマンションからは人の気配が感じられなかった。

いや、実際そのマンションには誰もいなかった。

建築されてからどれほど経っているのか、そもそも誰がいつの間に建てたのか、それすらも曖昧で異常ですらあった。

そして、それに気づいていない人々もまた異常であった。

人が存在しないはずのマンションだが、一つだけ例外があった。

8階ほどの高さにある一室、そこにだけ明かりがある。この場合、その一室の存在も異常なのだが。

そこでは、人が住むだけの最低限の家具とPCが一台あるだけだった。

その一台のPCに向かって画面を覗き込んでいるのは一人の少女。

世間一般で言えば美少女であると言えるほどの彼女だが、ただ画面に向かってしている少女の顔は人形のようにもあつた。

「マスター」

少女の口から言葉がでる。

しかし、それに答える声はない。そもそも、部屋には少女一人しかいなかった。

「システムが動き出しています。おそらく、今夜には事態が動くかと」

続けて少女が話す。

少女以外、誰もいないはずの部屋に。

それでも少女は誰とも知れず口を開く。

「件の少年に変化は見られません。本当に彼がそうなのでしょうか」

「んー、間違いないと思うんやけど。それもすぐに分かるやろ」

少女の声に答える声がある。

だが、その姿はない。真実、部屋にいるのは少女一人だけなのだから。

では、その声はどこから聞こえているのか。

「監視は続行。とりあえずそのままでええ。動きがあつたら即時対応ってな」

「はい、マスター」

そして少女は画面を見続ける。もう何かを話すつもりはないようだった。

どこからか響く声も、聞こえることはなくなった。

「ふいふ、落ち着いた」

飯食って、風呂入ってサツパリして、一息ついて牛乳をラッパ飲み。かあ、日本人で良かったなあ！

「もうすぐ日付変わることだし、さっさと寝るかね」

明日もまた学校だし。面倒だが行かなきゃ留年になるし。

親がいなくて好き勝手してるが、卒業だけはしろってのが親との約束なんだよな。

「つーわけで、明日に備えて……ん？ メールか？」

携帯ランプが点灯してメールの着信を示していた。

俺の友人は多いほうではない。というか、こんな時間に俺にメールしてくる心当たりは一人しかいない。

思ったとおりメールの相手は駆足だった。

一体どんなメールを送ってきたんだ。

『お前の好きなタイプってどんなやつよ。今後の教訓に是非聞いてみてえんだけど』

前々から思ってたが、確信した。

こいつは阿呆だ。しかもドがつくほどの。

さあ、寝ようかってときに何故にクラスメイトに好みのタイプを聞いてくるか。

しかも教訓ってなんだよ。意味わかんねえよ。

『髪は金髪。ただし、染めてるんじゃないで地毛でなくてはいかん。それでいてポニーテールなのは当然として、体型はやはりロリでなくてはな。性格はなかなか素直になれないツンデレタイプしか認めない。そしてそれらを兼ね備えた幼馴染だ』

そして俺はもつと阿呆だな。

律儀にメールを返して、内容も自分で打っておいて引くわ。

まあ、駆足だしな。気にすることないか、と送信。

駆足の返信になぞ興味ないし、俺はそのまま床につくことにした。

いやほんと、俺ってば酷い病気だな。

でもまあ、妄想するだけなら自由じゃん。ならこれくらい夢見てもいいじゃないか。

そんなことを考えながら、俺の意識は夢の中に落ちていった。

「……………！」

「んー……………」

「……………き……………い！」

「ううん……………」

「お……………なさ……………！」

「はふう……………」

「……………きなさいー！」

ううん、なんなんだ。

今日の目覚ましはいつもより三割増で響いてくるぞ。

まさかいつも俺がすぐに起きないことで目覚ましが進化したのだからか。

「起きなさいつて言ってるでしょ！」

なんと。

目覚ましは進化すると声がつくようになるのか。

初めて知ったぞ。しかも美少女の声だ。
俺くらいになると、声でその相手が美少女か否かわかるものだ。

「起きろって……言っでんしょう、がつ……！」

「じふっ……！！」

は、腹が！

俺の腹が強烈な衝撃を受けて口から息が漏れる。

なにかこう、先がとんがったものを受けたような。っていうか、エルボーという名の一種の凶器を。

知らなかった。目覚ましは進化すると美少女声で起して、拳句にエルボーをしてくるのか。

全然知らなかったな。よもや人類は目覚ましをここまで進化させたのか。

「って、そんなわけあるか！ 誰だこの野郎！」

痛む腹を押さえて飛び起きる。

大声をあげるのも辛い、怒りのほうが上だったらしい。

俺は突然の襲撃者に、驚きや恐怖よりも怒りで睨みつけて。

「……へ？」

そして絶句した。

「なによ。遅刻しそうになるあんたを起こしにきた幼馴染にたいする第一声がそれなの？」

俺の目の前に立っていたのは、朝日を浴びて輝く金髪をポニーテールにして、どこまでも強気な瞳をこちらに向けて、どうだと言わんばかりに胸をさらして身体の前で腕を組み、俺の幼馴染を自称する見た目小学生でしかないロリっ子だった。

〈第一話 顕現〉（後書き）

スローペースにもほどがあるクルツノナワです。

次に投稿したのが二ヶ月つて。我ながらどうなんだ、と。いやほんとすいません。

誰も見てないけど、すいません。生まれてきてすいません。

よし、謝罪終了。立ち直って次に行こう。

とりあえず第一話で、ヒロイン登場ですね。

ここから物語はどう進展するのか。謎の人物の正体はなにか。そもそも第二話を出すのか。

謎と波乱と混沌を含んだ第二話「お兄ちゃんどいて！ そいつ殺せない！」に乞うご期待！

次回予告と本編は内容が多々変わることがあります。ご了承ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7161j/>

妄想は世界を侵食する

2011年1月26日23時29分発行